

國學院大學學術情報リポジトリ

指定討論者コメント教育・保育の課題を自ら発見し
自己研鑽していく力を養う

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野本, 茂夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001302

指定討論者コメント

教育・保育の課題を自ら発見し自己研鑽をしていく力を養う

國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授

野本 茂夫

保育の現場について

それぞれ、とても充実している研究の発表だったと思います。各実践を含めた成果を聞くことが出来て、満足しています。色々聞きながら、考えながら、私の過去のものを引っ張り出しながら、指定討論のコメントを作っていました。そして折角のメンバーが揃っていますので、さらに深い討論をしていただければありがたいと思っています。

まず、保育現場ということについて、少し考えてみたいのです。つまり今日は、保育の実践との関係でお話があったと思います。保育の現場というのは、いつもその場その場での対応が



求められているわけで、そんなような話も、今日は多かったですと思います。現場というのは、いつも色々なことの最先端で取り扱っているというふうに考えていいのではないかなと思うのです。しかも保育現場では、いつも迷いながら

みながら対応している。これが保育現場で向き合っている保育者の方々だろうと思います。現場では、気になることへの対応というのは日常であり、それが仕事であると言ってもいいのではないかと思います。

例えば、保育者は、現場で出会い、現場で気付き、現場で考えるというようなことをしています。このことが、実際、保育者としての仕事のやり甲斐であり、また、難しさでもあると言っているのかなと思います。これは私の関わってきている分野からすると、「臨床の場」であるというふうに考えることが出来ます。その現場で反省的実践家としての専門性を持った仕事をしている。それが保育者ということになるかと思えます。

次に、保育現場で仕事をするようになったときの保育実践力の育成ということ、ここで話されてきたのだと思いますが、実践力の育成ということを考えると、実は学内でやっているだけでは、なかなかここまで行かないかもしれないのです。実際には、その場その場に應じた、今話したような「臨床の場」ということを考えると、常に臨機応変な対応ということが求められます。

この臨機応変さが、学生が現場に出て行ったときの不安感で

あるとか、対応に自信が無いとか、現場の先生のようには出来ないとかいう難しさになるのかなと思います。例えば、現場では多少のことが起きて動じないような「不動心」と言いますか、無心に関わっていくという力がどうしても求められると思います。

また、保育者は、人間の色々な無意識や身体・感情反応に注意深く対処して行きます。そういう意味では、保育者は無意識とか身体感情への信頼感というようなものが確かなものとしてあるのだと思います。それは学生にはなかなか見えないだろうと思います。その場の状況とか関係性を把握して、最も適切に対応するという方法は、その信頼と適切な位置取りとして、今日の基調講演の中で中坪史典先生がそういうことを数多く話されていたかなと思います。

それから、これも同じことなのですが、即興的な対応です。カウンターバランスということが、いつも必要になってくる。関係性を組み替えて、カウンターバランスの中で色々力を調整しながら、最適な状態を瞬時に判断する。こういう力が求められているわけです。

さらに、色んなことをやると失敗したりします。どうにもならなくなってしまう。だから、そういうことになっても恐れずにやり遂げようとする、忍耐力と覚悟、こういうようなものが必要であり、ある意味、「求道性」と言ってもいいようなものがあるかもしれない。しかし見通しがある「求道性」なのです。そういうことが必要になると思うのです。

スクール形式から対話主体の研修へ

私は、保育者の研修をいろいろお手伝いすることがありますが、何となくスクール形式研修講座をやっていると、講師の話の内容はいいのだが、保育実践になかなか繋がらないとか、その園内の同僚に問題意識が伝わって行かないとか、或いは、自分の意見や考えが尊重されないとか、というようなことが数多く出て来るわけです。しかし、こうした講師の話が中心で、座って聞くだけの研修会が行われています。これは、学校でのスタイルなので、スクール形式の研修といわれ、主に講義をする場合、この方法が今まで数多く取られていたと思います。

やはり、どうしても講義だけ聞くというの、一人だけの学びになってしまふ。こういう学びはどうも浅いのではないかと。そうではなくて、色々な人と考えや意見を交流させていく。こういうことが学びとして大事になってくるのではないのだろうか。保育者が悩みや課題持ち寄って向き合ってみると、もっと違った学びへと深まっていくのではないかと。実際に、研修会に保育の実践者が集まって課題や問題に向き合うと新たな学びが生まれてくる。その中で、保育の多様な見方や保育の視点について学び合うことになる。自分の見方だけではなくて、自分には無いいろんな視点から保育の実践を捉えることが出来る。こういう学びが今、現場で必要になっているのではないかと思います。

そこで、私が最近取り入れているのが、保育者の対話を主体とした研修です。集まった人たちが、小グループで集まったり、或いは仲間を替えたりしながら対話をしていく、そうすると、

色んな気づきが生まれて来るということを経験しています。

例えば、そういう研修の中で保育者が何を学び取ったか、色々と何を気付いたか、発見したか、ということがあるわけです。

ここで紹介するのは、その感想のごく一部です。やはりただ聞いている講習というのは、メモを取って一生懸命聞いているというだけで終わりがちなのですが、保育者の対話を中心とした研修では違います。例えば、「対話を通した学びを体験してみても今までわからなかったことや気づかなかったことがまだまだあったことに自分自身驚きました」とか、「たくさんの人と対話しながらかみ砕いて学ぶと、より一層、理解出来ます。実際に、保育現場に戻った時、なるほど、と実感することが多いです。自分自身の見方とは違う意見を交換し合う事により、深いところのある、保育が広がっていく気がします」とかというような感想が出てきます。



これらは、三十代、四十代という結構長い経験を持つベテランの保育者なのです。次は、事例を聞いた後の話し合いでの学びです。例えば、「少しずつT君のことを探求していく気持ちから」、さらに「これもありなんだよね」と、個を認めていく流れになっていく対話って、保育ではとても大切なんじゃないかな」、「表現の仕方が難しいですが、感動しまし

た！」。この保育者同士の話し合いの中で、自分自身がどんどん変わっていく、見方が周りの保育者も含めて変わっていく、ある納得のいくものに到達出来たというものがある。そこに「深い学び」というのが、実際の現場の先生の中にもあるのではないかとということに気付かせられます。

また、「他の園の先生たちのさまざまな経験や困ったときの対話の仕方、一人ひとりの先生すべて違った対応をされていて、とても自分が仕事をしていく上で勉強になりました。色々な先生たちの考え方が多々ある中、みんな子どもの将来を見据えて、その先が一致しているところに共感し、好感を覚えました」。この方は五十七歳で三十年以上保育経験をjして来ているのですが、この対話を中心とした研修の中で、また、さらに一段深いことを新たに発見するのです。

保育実習直後における対話型授業

この保育者の対話を主体とする研修のように、現場との関わりを絡ませながら学んでいく学び方というのを、この人間開発学部の中にも取り入れてみようと思ったのです。例えば、子ども支援学科の中での学びで、私だけではないと思うのですが、他の先生も授業で大切にしているのは、どちらかというと専門的な知識や理論、技術・方法を学ぶことではないかなと思います。その授業の中で、学生は学びや気づきがそれぞれなりにあると思うのです。この学びをもって保育現場に出てみる。現実の保育現場ということを体験してみる。実習だとか、教育ボランティアとか、インターンシップ等で、こういう現場体験

が行われます。そこで色々な経験して行くわけです。その現場の経験の中で新たな保育の問題や課題に気づき確認するわけです。大学で学んできたことについても、現場で確認することが起きると思います。そして、これで終わってしまうのではなくて、それをさらに大学に持ち帰って、また授業を受けることとなります。

そうすると、現場に出る前に授業で学んだことが、より明確な問題意識と課題意識になって生まれて来ます。そこで大学の授業を受けるわけです。そうすると、また、その授業の中からさらなる新たな学びや気付きが生まれてきます。そして、また、現場に戻っていく。こういうことの繰り返しをして学ぶ、「往還的な学び」を人間開発学部の先生は、大事に考えていると思います。子ども支援学科は、まだ三年目なのです。実習も始まって浅いというところがあるのですが、少しだけ私が関わっているところでのことを紹介しながら、今日の話題と噛み合わせてみたいと思います。

六月に保育実習の最初の実習を行ったのですが、その保育実習を終えた翌週の授業のことです。色々な授業で、きっと感想を聞いたりしていると思うのですが、私は学生同士で対話をするために、その授業を使ってみました。それぞれの学生の保育実習での学びを、この授業の中で融合させて共有してみようということを試してみました。

わずか四十分の時間でした。一グループ四人、一人十分は話せるグループ編成をします。グループごとに、スケッチブックにメモ書きしたり、アイデアを書き加えたり、気付いたことを書いたりしながら話し合います。こんな形式で話し合いをしま

した。その話し合いの中で少し工夫をしていて、最初の話し合いは、そのグループでします。その次には一人だけ、そのグループのホスト役で残って、他の三人は別のグループに移動するのです。そこでまた四人で話して、それからまた元のグループに戻って話をします。学生は、それぞれたくさん学生の話に触れることができます。そして、五十人ぐらいのクラスなのですが、殆どの人の意見を全員で共有することができます。これはワールド・カフェという対話の仕方です。色々な所でやられているかなとは思いますが、私はそれを実施してみました。

そうすると、学生が思っていた以上に、実践の現場に出て経験してくると、色々なことを気付いて学んでいるなということが見えてきました。単に感想を聞いて、一人の感想だけではなくて、色々な人と意見を交流させたり、感想を聞き合ったりすることで、一人一人の学生自身の気付きが非常に多角的になってくるのです。その幾つかを少し紹介してみたいと思います。

「話すことで、実習で思っていたことはどんどん出てきて、自分でもこんなことを思っていたのかと、自分で話している中で驚く。みんな思うことが違って、もちろん同じでもあったりしますが、保育というのは本当に幅広い考えがあるし、保育者一人の在り方で全く変わってしまう。」

こういうことを、実習を終えた学生が話し合って初めて気付くのです。

「実習での学びや不安、悩みを話し合うことが出来、同じ

ようなことを考えていたのだと思ひ安心しました。実習先の先生も話していたけれども、日々、正解のないことをやってみて、良かった、ダメだったということを反省し、よりよくしていくということが必要だと感じた。自分一人で事例を考えても偏った考え方になってしまいうけど、グループで話し合いをすると自分にはない視点から物事を考えているので、たくさん参考になった。実習を通して何を学んだかは、実習が終わってから何度も振り返り考えてきたが、今回、いろんな人の意見を聞くことで、自分にはなかった視点からの話が多く、非常に新鮮でした。たくさん話が聞けて、そして、自分の話をすることによって、自分の中でも感じたことを深められたと思います。」

私は、結構すごいな、学生はここまで考えるのだと、少し感動したのです。

「特に『支援』と『手伝う』のニュアンスの違いに感心した。子どもができないことを『手伝う』ことによって出来るようにするのはなく、自分で出来るようにするにはどんな『支援』をすれば良いか、いま出来ることへの喜びをどう一緒に共有していくのか、大事な考え方であるなと思った。実習として経験してきたものはとても大きく、自分ももっと頑張りたい！次はこういうことをしたいという気持ちにさせてくれました。」

これなんか、本当に自己課題を見つけている。

色んな学びをしていく中で、そこにいる学生同士を交流させていくことで、色んな視点からの気付きというのが生まれるのだなということ、この授業で感じさせてもらいました。

本物の「深い学び」になっているのか

そこで、今日の話題提供をいただいた中で色んな工夫をしてみたわけですが、本当にこの大学の養成段階での学生の学びというのは本物の「深い学び」になっているのだろうか。学生には、そういう「深い学び」ができる力が本当はあったり、気付きもあるのだが、そういうものを引き出したりとか、触れられるというふうになかなかならないのではないかと。私自身がなっていないのではないかと反省させられているわけです。吉永安里先生も「深い学び」ということを繰り返し仰っていました、アクティブ・ラーニングをしても、「深い学び」になるにはどうするかというところが本当は課題だと思っております。結果的にお茶を濁すようなことで終わってしまうというふうな授業になっているということも案外あるのではないかと思われます。

実際に色んなことを工夫して、やってみようとするのですが、ただそれは、教育する側だけの努力工夫では成り立たないのです。教育方法の問題だけでなく、このたまプラーザキャンパスを見ると、従来の一般教養をマスプロでやっていたときのよくな教室の造りになっていることの問題もあります。吉永先生の写真にもありましたけれど、話し合いをしていましたが、向き合って話し合いをしてみると、お互いに椅子を向けるぐらいいしか出来ないのです。机の移動も出来ないような教室がた

くさんあります。そうすると、色々工夫をして、より本物の学びにしたいという願いも意欲もあるのだが、テーブルを囲って話し合いをすることすらなかなか出来ないという、物理的な要因もあるかもしれないような気もするわけです。

こういう状況を、一体どう工夫していったらいいのか。色々工夫はしているわけなのですが、やはりなかなかその辺の難しい限界もあります。先生方はどんな工夫で物理的な制約を乗り越っているのかということも、それぞれお聞きしてみたい。出掛けて行って外での活動をするなんていうお話もあったと思いますが、全てがそういうふうに行くわけでもないように思います。つまり、こういう制限のある教育環境では、何か試験管の中での実践で終わっていないか。もっと本物の学びの実践になるようにしていく必要があるのではないか、という考えが、そこに生じるわけです。

そんなことを踏まえながら、学生の本気が出る学びにするには、今日発表をしていただいた内容を、さらにどう活かしていったらいいのかということについて、さらに一歩先のお話をお聞きしたいというような思いにちょっと駆られております。その点に触れていただけると嬉しいと思います。それぞれの実践について、それをどう、さらに結びつけていこうとしているのかというところまでお話いただけるようお願いいたします。

その上で、それぞれの話題提供について、簡単なことなのですが、質問したいと思えます。

請川滋大先生には、幼稚園でのフィールドワークを経て、どのようなテーマと内容の卒業論文になるのか。どういうものが出てくるのだろうか、どんなテーマで行われているのか、また、

それは保育実践に関わるようなテーマが出てくるのか。それが分かるようでしたら、少し触れていただきたい。

高橋健介先生には、「出づかい」ということで、観客の子どもたちと“見る―見られる”関係の中で学生が学ぶということがありましたが、それは学生にとつて、どういう体験なのか。そのことが、具体的なゼミ内の関係を、もっとより良くしたいというような話があったと思うのですが、そこにどう影響して行ったのかということに触れていただければ、嬉しく思います。

それから、結城孝治先生には、非常に分かり易く明快だったのですが、セルフモニター群と相互評価群と比較して、こういう心理実験の結果から確かに差があったわけなのですが、それをさらにディーブ・ラーニングとどうか、授業や学習方法の改善に何か結びつくと思えば、どういうふうになんか役立てているのかということに触れていただければと思います。

吉永安里先生には、非常に簡単なことなのですが私はすごく大事だと思っている点について、聞いてみたいことがあります。吉永先生は、色々活動しながら、三科目、自分の担当している科目を繋げながらやられて来られているのですが、その中に色々な活動を入れてアクティブ・ラーニングを行っているわけですね。学生の能動的な活動をしてもらうことの目的意識の明確化ということが大事だと、学生が自覚して取り組むことが大事だというふう最後に話していたと思うのですが、それをどのように具体的に学生に伝えて説明しているのかということについて、ぜひお聞きしたいと思えます。

少したくさんの内容があったかもしれないのですが、どうぞ宜しくお願い致します。